8. 産業

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/46930

8. 産業

清原 永吏

1. はじめに
2. 地域の産業の概要と変遷
3. 現在の産業
4. 考察
5. おわりに

1. はじめに

今回の調査の中で、上町地区の人々からそれぞれの仕事や生活についてのお話を聞くことができた。そのなかで、地域の産業に起こった大きな変動について知った。本章では、地域の工場の特徴からその役割や性格を文献や聞き取りからまとめる。全体としては 2 節で概要と過去、3 節で現在の様子を示し、4 節で集めた事実についての考察を述べる。

2. 地域の産業の概要と変遷

本節では、まず地域の産業のなかでの第二次産業の位置づけを統計データから示す。あまり新しいデータは得られなかったが、具体的な数字で地域の産業の移り変わりについて概観する。続いて『柳田村史』（1975 年）で分かった仕事内容について、聞き取り調査で伺ったお話とあわせて記述する。

2.1 概要

産業別に見ると、工業にあたる第二次産業の就業割合は昭和 50（1975）年から 60（1985）年の間に 23.1%から 31.3%に上がり、それ以後は第一次産業の急激な縮小と第三次産業の急激な拡大に挟まれながら 35%程度を維持した(『柳田村 30 年のあゆみ』2005：90-91)。

地域の全体人口は低下しているため、就業人口自体は数としては減少しているのだが、昭和 50(1975)年に一度増加してから割合としてはあまり変化がなかったようである。

2.2 これまでの産業

地域の産業は、高度経済成長の影響を受けてからその内容が大きく変わり、上で示した割合に影響を与えている。また、忘れてはいけないものとして出稼ぎがある。昭和 50（1975）年をポイントに、その前後で地域内の工業および地域外への出稼ぎにどういった変化があったかについてまとめる。

昭和 30 年代（1955 年）までの製造業

当時の工場は、柳田全体で見てもわずか 12 工場、従業員 38 名のみであり、工業の発達した地域とは言えない。その中でも零細工場が非常に多く、上町地区にある工場はどの工場も従業員が 3 人以下であった（『柳田村史』1975：706）。

村史には瓦製造、製材工業、家具建具業、麹、鍛冶業、採石業についての記述があり、それぞれの項目についてここでまとめる。

瓦製造

原料となる土や燃料・道路の便などの点から、瓦製造業は一般的に海岸近くに立地するものであるのに対し、柳田は内陸の地であり工場を建てるには通常適さない場所であるが、合鹿の村境の山では昭和 25（1950）年頃まで製造が行われていた。地元の赤粘土を用い、労働力も村内で集めた。カヤ葺屋根から瓦葺に切り替わる時期に地元での瓦の製造はとても便利であったが、採算があわず廃業になった（『柳田村史』1975：704-705）。

製材工業

上町に「角製材所」があった。戦後に木材の需要が高まっており、昭和 28（1953）年に創業された。製材の販売よりは賃挽が主であり、村内全般にわたって木材処理を請け負っていた。他地区の製材所とは違い、角製材所では昭和 38（1963）年まで宇出津へ出荷する魚箱も製造していた。杉松材の製材の木片板でつくるもので、漁期になると一か月 500～800 箱を出荷していた。しかし柳田の製材業には、広葉樹が多く針葉樹が少ない、近縁の町でも製材は盛んであるなど問題点も多く、土木建設業を兼営していたが、道路や河川の工事が活発で製材以外の収入が主体となっていた（『柳田村史』1975：706-708）。

家具建具業

柳田全体で家具製造は一戸だけであった。零細であるが、当時は兼業を含めると約 25 戸が建具業に従事していた。戦後に創業されたものが多かった。合鹿に 4 戸、上町・天坂・寺分に各 1 戸と、広く分布した。板戸・ガラス戸・唐紙などを製造しており、元来多かった板戸は、材料において村内産は使用量の 3 割であり、そのほかは三井・穴水などから買い入れていた（『柳田村史』1975：708-709）。

麹

味噌加工に、麹は欠くことのできない材料であり、麹製造業は古くから柳田村内に広く分布してきた。上町にも 1 戸、家族で麹製造を行っている業者がある。麹製造は春先

が多忙で、農家とは米 1 升と麹 1 升を交換して、味噌の仕込みを行った。1 升の米に酵母菌を加えて麹に加工すると、約 1.6 升になった（『柳田村史』1975：710-711）。

鍛治業

農村には農具の製造修理をする野鍛治が昔からあった。農村の鍛治屋は、その土地の土質・地形・農法などを考慮して、それぞれの地域と農法に適した農具製造してきた。上町地区には、中斉に 1 戸あった。農具は耕耘機などの機械化が進んできたため、この業種は当時から衰退傾向にあった。

燃料は松炭である。昭和 20 年代中頃までは手動のフイゴなどを用いていたが、昭和 27（1952）年頃からモーターが利用されるようになった。

柳田村の鍛冶業で特徴的だったのは、採石用の石ノミや半鍬がつくられていたことである。村内に採石場があったのでそこで使用した（『柳田村史』1975：712-713）。

採石業

この地域には特徴的な地下資源は見られないが、採石業は行われた。元来、のとは岩石・砂利のきわめて乏しい地域であり、土木工事の資材としての自給は困難である。そういった資材は基本的に富山県から船で運び込んできたものを使うことになり、それが原因で工事費も高くなり、道路の整備状況にも影響を与えた。

寺分と天坂に採石場があった。安山岩がとれる寺分で道路用バラス、凝灰岩がとれる天坂では切石と、とれる岩質が異なるため用途も異なる。比較的部落に近く交通の便の良いところに立地した（『柳田村史』1975：717-718）。

このように昭和 30（1955）年頃は、従業員の少ない零細工場が多い。扱われている製造品は地域内の必需品であり、工場の性質として、地域内での自給を目的としあまり採算を重視していないという点があった。家族単位で完結できる業種も多く、従事者層はかなり限られていたようである。

2.3　昭和 50 年代（1975 年）の製造業

高度経済成長下の工業の発達

昭和 30（1955）年以降、国や県で経済は大きく成長を続け、特に工業面では急激に発展していた。しかし、内陸農山村であるこの地域では、その潮流に乗れず、かえって差が広がる悪影響すらあった。燃料革命などいろいろな面での大転換がおこり、それまでの産業は成り立たなくなったものもあったが、それに代わるものとして村内で適切なものはなかなか見つからなかった。農村から労働者を求める他の地域へと、就職あるいは出稼ぎに出る人が増え、次第に柳田でもその傾向が目立つようになった。経済的には家庭の生活を支えることができるが、過疎化する村の活動は衰えてしまう。

過疎化による衰退を防ぐため、村当局は、出稼ぎを抑制し就業の場を村内に設けるために、当時他の地域で行われていた工業誘致条例を参考にして、昭和 42（1967）年に「柳田村向上事業設置奨励に関する条例」を制定した。

それ以降村でも工業化が進むようになり、特に宇出津・町野に通ずる県道沿線のような、交通条件の良い地点に多く立地した（『柳田村史』1975：722-725）。

繊維工業

昭和 30 年代末から 40 年代初めにかけての能登半島の工業化は繊維産業から推進された。石川県の工業の主体である絹人絹織物（きぬ・じんけんおりもの、人絹とはレーヨンのこと）工業は、口能登あたりには戦前早くから展開していたが、これが合成繊維織物に移行し、国全体の高度経済成長の中で奥能登にまで波及したのは 1970 年を過ぎた頃からである。

出稼ぎ防止方策として推進され、昭和 42（1975）年に村役場で織物業経営の希望者を募ったところ約 30 人の応募があった。村当局は説明会を開くなど成立を支援した。織機 1 台につき 5 千円の補助金の支給もしていた。そういったバックアップがあり、昭和 43（1968）年に 8 企業が同時に創業し、翌年さらに 3 企業が加わった。

これらの会社は八台機屋という 24 時間フル運転の織機を用い家族労働力を主体とした経営形態をとった。昭和 47（1972）年時点では合鹿や上町にこういった工場があったが、いずれの会社も 6～3 人の従業員で 14～18 台の織機を動かしていた。出稼ぎに比べると収入はやや劣るが、家庭生活との両立ができる利点があった（『柳田村史』1975：725-727）。

西陣綴

人絹糸を使って主として懐紙入れを織るもので、農家が木製の手機 1～2 台を入れて副業的に行うものだった。昭和 45（1970）年から地域で普及し始め、昭和 47（1972）年には上町、合鹿、中ノ又合わせて 20 軒強と、従事する人が増えていった。輪島市で行われていたのをみて、それにならって京都から直接技術を習得した。原料糸と原画が京都から持ち込まれ、製品も京都に送る。1 枚単位で 175～180 円で、一ヶ月の収入は 3 万円程度だった。家事をしながら、年中通して製造できるということで 30 歳代後半～50 歳くらいの婦人が作業していた（『柳田村史』1975：729-730）。

斉和電子製作所

昭和 47（1972）年神和住に成立した。従業員は 30 人で、ソニーカラーテレビの部品基盤を挿入する作業をしていた。親会社は京都の村田製作所で、宇出津にあるその会社の系統下の工場の下請けの仕事をした（『柳田村史』1975：734-735）。

A さん（神和住、男性、60 歳代）によると、斉和電子製作所の従業員には、地元の女

性で、出稼ぎに行かない人が集まった。平成 11（1999）年に解散した。

岩石砕石製造業

これまで見られた切り石や間知石の製造はコンクリートブロックの普及により昭和 41（1966）年を境に消滅した。採石業は引き続き行われているがいぜん従業員 3 人程度の零細企業である。天坂砕石は昭和 50（1975）年には休止した。寺分や神和住では当時まだ続いていた。採石は年中行われたが、冬は従業者が出稼ぎに出るので減少した。道路用の砕石は推水洗不要であるが、コンクリート用には水洗を要する。これが河川の汚濁を引き起こし、下流からは公害と非難されていた（『柳田村史』1975：735）。

建具・指物業

昭和 30 年代に比べ総数は減少しているが、村内に広く分布していた。製品は従来の木造製品だけでなくアルミサッシ製品も加わるようになり、当時の農家の建築ブームのなかでたくさん仕事があった。しかし、この頃から外来の業者の増加も見られるようになった（『柳田村史』1975：736）。

建設業

高度経済成長に伴い、道路建設、河川改修農業構造改善事業などの公共事業が多くなり、また、鉄筋コンクリート工事や一般木造家屋の建築も普及して、建築業は活発だった。工事の機械化で婦人老人層の労務者も増えた。しかし、基本的には 5 人以下の零細企業であった（『柳田村史』1975：737）。

D さん（神和住、男性、70 歳代）は、中学校を出た後に、中斉で大工見習になった。昭和 35（1960）年に神戸に大工仕事の出稼ぎに行き、その後昭和 37（1962）年に戻り以降は柳田で大工をした。なじみの弟子同士で組み、大きな木造建築を 20 余り手掛けた。

その他の工業の変遷

上記のように高度経済成長で村でも新興工業の発展があったが、対して従来のもので衰退した工業もある。製材工業はかつて村の中心工業のひとつであったが、上町地区では廃業になった。麹製造や鍛冶業は昭和 50 年代でも存続していた（『柳田村史』1975：737）。

2.4　村内の他の地区の工業への従事

昭和 40（1965）年に新しく電子や縫製の工場ができたが、これらの職場は、これまでの基本的には小規模に行っていた工場とはちがい、一定数の従業員を雇用するので、少し離れた工場であっても上町地区から就職した人がいた。長尾の洛趣織の工場や、笹

川の柳田電機製作所があり、特に後者は当時（1975 年）125 人の従業者をかかえており、それに加えて当目・十郎原のそれぞれ 15 名程度の従業員の働く分工場をもっていた。従業員の中心は 30 歳代の主婦だった。特に柳田電機製作所では 20～45 歳の女性が 85%以上を占めており、男性は 1 割に満たなかった（『柳田村史』1975 : 727-734）。

このように高度経済成長の影響が村に波及し、繊維や電子といった新しい業種の工場が増えた。こういった工場は、それまでとは違った運営形態をとっており、それにより今まで思うように働けなかった女性が労働者として雇用されるようになった。

2.5　出稼ぎ

日本全体における出稼ぎ労働者の数は、高度経済成長に伴って増加し、昭和 40 年代後半にピークをむかえ 55 万人にものぼったが、オイル・ショックを景気とする経済環境の激変により以後減少した。最盛期における出稼ぎの一般的な特徴としては、男子・中高年層といった基幹的農業従事者が農閑期を利用して大都市工業地帯の土木などの単純労働に携わるという形態が多かった。

その後、経済成長がスローダウンすると、企業は減量経営を意識し雇用調整をはじめたため、数年間の間に全国の出稼ぎ人口は半減したが、同時に供給地の特定化集中化も進んだ。全国的には減少傾向にあっても、まれには増加している地域もあった。増加する地域に見られる特徴とは、農業従事者が多い水田単作地域であり、冬季は寒冷で降雪がある地域である。東京都との賃金格差が製造業において特に大きい。出稼ぎ期間の長期化・通年化の傾向もみられる。増加した地域として象徴的なのが東北である。

北陸出身者の出稼ぎ人口は全国対比で昭和 47（1972）年から昭和 59（1984）年にかけてずっと 8%前後を維持していた。そして、その内訳を見てみると、北陸 4 県でも特に新潟県が 60.7%、石川県が 33.8%と、これら両県で 95%近くを占める。年次別推移でも石川は減少率が低い。出稼ぎ人口が多くなる要因として考えられる賃金格差を昭和 60（1985）年のデータで見てみると、東京を 100 とすると、全国平均が 79.4、富山が 68.3、福井が 63.3 に対し、石川は 56.2 と 60 を下回っており、中には 40 代に割り込む東北よりはよいとはいえ、やはり大きな格差がある。

石川県の場合、能登半島、特に奥能登に局地化した。県全体を安定所別に見ると、能登と穴水の職安管内で 97%という圧倒的な割合を占めている。柳田村の年次別推移を見てみると昭和 46（1971）年を 100 とすると昭和 60（1985）年は 58.0 であり、県平均の 45.3 を上回っていた（『出稼ぎの総合的研究』: 1-5,69-73,115-120）。

何人かの人に出稼ぎの様子についてのお話を伺うことができた。

A さん（神和住、男性、60 歳代）

冬、農作業ができず、出稼ぎに出る人が多かった。男性が金沢や関西に行くのだが、夫婦で土建の仕事をしに行く人もいた。村が年寄りや子供ばかりになるといった状況の

時もあった。

B さん（上町、男性、60 歳代）

静岡の酒屋に出稼ぎに行った。能登から 40 人程一緒に行ったが、自分が勤めていた 7 年間のうちに高度経済成長で工場が機械化し、その中で人数が半分以下に減っていった。

C さん（神和住、男性、70 歳代）

富山県の黒部市で砂防堤防を作る仕事、運送会社の仕事、大阪で野球場のフェンスを張る仕事、東京で 3 年間オリンピックにむけた地下鉄の工事などさまざまな仕事をしてきた。収入はほとんど家に送金しており、暮らしは厳しい時もあった。父親が亡くなったことがきっかけで実家に戻った。

D さん（神和住、男性、70 歳代）

中学卒業後、大工見習になった。昭和 35（1960）年、23 歳の時に、神戸の西宮に友人の伝手で行き大工の仕事をもらった。アパートを建てる話などが多くあり、棟梁に頼まれ 2 年ほど神戸で働いていた。

B さんの話している酒屋の出稼ぎとは、能登杜氏という酒造出稼ぎ集団である。兵庫、滋賀、静岡、京都など全国各地の酒造に従事しており、丹波杜氏や越後杜氏などと並び、広く知られた一団だった。能登杜氏組合の記録によれば、昭和 60（1985）年の時点で杜氏 99 名酒造従業員 573 名・計 672 名が在籍していた。中心は珠洲市や内浦町の人々だったが、柳田や穴水といった隣接町村からも集まってきていた。昭和 2（1927）年では 2046 名という記録が残っており、規模の縮小や高齢化などの傾向はあったようだが、古くからあった出稼ぎの一形態であった（『出稼ぎの総合的研究』1987：73,119）。

年間を通して出稼ぎに出ている人もいるが、農閑期に合わせて追加収入を得るために冬だけ村外に働きに出る人も多かったようだ。

このように家計やその他各々の事情にあわせて出稼ぎが行われていたが、それは先に示したように、能登にも工業化が広がることで状況が変化した。

A さん（神和住、男性、60 歳代）

昭和 40 年代頃になると、神和住の斉和製作所や笹川の富田縫製などといった電子工場・縫製工場がつくられ、そうした工場は全部で 12、3 か所存在していた。これによって村内の女性は出稼ぎに行かなくても働けるようになった。

E さん（上町、男性、60 歳代）

昭和 40 年代後半の町村合併以降、柳田村でも地元住民中心に起業をし、雇用の場が増えた。起業された約 10 社のうち、9 社が地元住民により創立された。種別に見ると、電子・縫製工場が大半で、女性従業員が多かった。

このように、昭和 40（1965）年頃に村内に新しく工場が立地することで働き口ができそれまで村外にお金を求めに行っていた人も村内で収入を得ることができるようになったのである。村外への人口流出の対策として制定された条例が、当時効果的に機能していたことが分かる。しかし、こういった状況もまた変化していった。

E さん（上町、男性、60 歳代）

バブル期はとくに残業が多く利益率も高かったが、昭和 40 年代に生まれた地元企業は今ではほとんど残っていない。

度重なる不況が経営に影響をあたえ、廃業する工場が相次いだ。昭和 60（1985）年頃までにはほとんどの会社が引きあげてしまい、現在でも稼働している工場はごく限られている。

3. 現在の産業

好景気の時代にできた工場も、現在の不況では大半が引きあげ、現在ではその数はかなり限られている。今回は、能州ソーイングと柳田製網の、2 つの工場についてお話を伺うことができた。工場の現在の様子はどのようなものであるか、能州ソーイングについては現社長の E さん（上町、男性、60 歳代）に、柳田製網については前社長の F さん（上町、女性、80 歳代）からの聞き取りをもとにその個別事例を示す。

個別事例

①能州ソーイング（昭和 50［1975］年～）

昭和 50（1975）年に創業した縫製会社。創業当時数年間にわたって、この地域で電子機器などの工場があいついでおこった。その潮流に応じ、先代の社長で現社長 E さんのお父様がはじめた。それまでは家では農業を営んでいた。創業当初は家のそばの作業場で 10 数人の従業員で、ベビー服などを扱っていた。

昭和 54（1979）年に当時 24 歳の息子 E さんに社長が代替わりした。それ以前には、福井の会社に 1 年間務め女性のスカートなど洋服を作っていたのだが、この年に上町に帰ってきた。外部での経験を活かし、婦人服をメインに据えるようになった。

昔はダイエーなどのデパートや専門店などへひと月に千～5 千着程度出荷していたが、今は減ってしまった。就任当時は周辺地区全体でも縫製や電子機器の会社があったが、バブルの崩壊など度重なる不況で順々に畳んでしまった。

現在、従業員は全員で 21 人。ほとんどが女性で、裁断を担当する 1 人が唯一の男性従業員である。全体の平均年齢はおおよそ 50 歳代ぐらい。半分はパートタイマーとして雇用している。

朝 8 時始業、夕方 5 時終業で作業している。機械を導入し、今は大阪など都市部中心

に 4 社と取引しており、ひと月に千～2 千着の出荷をしている。始めたばかりの頃には繋がりがなかったところとも、紹介が重なって現在のような関係になった。

製造工程については以下の通りである。まず、仕事を引き受けると発注元の方から生地が届く。糸などのその他必要な材料については、ブランドによって指示がある時もあるが、そうでないときは E さん自身がカタログを使って探す。

納品について、以前は運送企業が周辺の縫製工場の製品などもまとめて請け負っていたが、既に引きあげており、今は完成品を E さん自身が運転して納品しに行く。東京の問屋に届けたこともある。取引相手にも注意している。自社の体力もある。経営を維持するために、いろいろなリスクに気を配っている。

新しい従業員が入りにくく、続けてくれる人も次第に年を取っていく。

女性が多い職場なので子育てしやすい環境である。パートタイマーも多いが、学校の行事をなるべく優先したり、子供の保育所の時間にあわせたりなど、かなり柔軟に対応している。入学式・卒業式の式事があると作業場ががらんとしていることもあった。

E さんには息子さんもいて、家族間の交流も密であるが生活の基盤は珠洲市にある。

この先の景気のこともあり、現時点で会社のこの先については、いまだ未定である。

②柳田製網（昭和 44＝1969 年～）

昭和 44（1969）年に設立された製網会社。金沢に本社があるホクモウという企業の工場である。網は特に、一ヶ統（いっかとう）と呼ばれる複数の層になった定置網漁に用いられる大型網である。

設立以前、公務員や家で地域の郵便局をやっていた F さんだが、PTA 会長を務めていた時に、能登町の町長から、家のことがあり出稼ぎにも行けない人たちの仕事の場を上町に作ってほしいと頼まれたそうだ。

F さんはその頃から起業したいという希望は持っていたそうで、候補として老人ホームなどを考えていたそうだが、町長の話をうけて家庭のある女性でも働ける、手に職をつけて長く続けられる業種として製造業を考え、知人をたどってホクモウにたどり着き、製網会社を提案した。

設立当初は、鮭鱒の網を作っており、家を空けられない近所の女性や若い人 14～5 人が中心だった。シーズンがあり、夏～秋、また 2～6 月といった漁期に合わせて出荷が増えた。

第二次世界大戦後、食糧問題の解決と漁業復興が積極的に行われ、漁船の建造や、漁業資材の充足に向けて急速に需要が高まった。日本の漁業における戦後体制が改善された 1952 年からの漁業生産は戦前を超え、年々増加するようになった。

排他的経済水域の考え方が 1967 年に提唱されていながらも、1972 年頃に生産高はピークを迎えた。しかしやはり、それまで国ごとに範囲がまちまちだった領海と合わせて経済水域統一の考え方が次第に世界に波及していった。

日本でも、1977 年の領海法改正と漁業水域に関する暫定措置法の施行により設定され、他国でも 1980 年代前半から世界的な 200 海里体制による規制が設定され 1982 年には国連海洋法条約が採択された。ここから遠洋漁業は右肩下がりになっていった（加藤 2006：2）。

こういった状況を受け、工場は鮭鱒の網から製品を変えることになった。それが現在の一ヶ統の網になるのだが、従来に生産していた鮭鱒の網とは生産方法が異なるので、昭和 56（1981）年頃から数年かけて徐々に導入準備を始めたそうだ。専門的な知識は金沢の本社から指導員が訪ねてくるので、そうして技術を蓄えていった。

昭和 59（1984）年に本格的に生産切り替えを行った。それまでより網が大きくなり作業量が増加するため、工場では、知人の伝手やすでに従業員だった人からの紹介などでこの時期に一斉に増員を行った。ハローワークはあったものの、そちら経由では製網会社には人があまり見込めなかったので、ほとんど利用しなかった。

網づくりは丁寧な手作業で行われる。図面を見て機械なしで、品物にもよるが数百 m にもわたる大きな網を作り上げる。3 ヶ月前には注文を受けるが、裁断や部品を揃えるなど、準備に時間がかかる。また、製品もおおがかりなものであるため、ミスがあってやりなおすことになった場合、その負担は非常に重たい。慎重な作業はいい評判につながる。作業で重視しているポイントである。

発送先は近くの富山から北海道まで、全国各地で製品が使われている。作るのに 1 ヶ月以上かかるものなので、最後まで大事に扱う。

仕事も製品も専門性が高いため、供給する工場も少なく、注文は安定している。能登は交通の便が悪いが、大きな製品なので注文先が直接引き取りに来る。

現在、従業員は全員で 38 人であり、近所だけではなく、輪島や珠洲といった少し離れた場所からも人が集まっている。このうち女性が 34 人、男性が 4 人という内訳である。やはり女性が多い職場である。パートタイムの若い従業員が増えているそうだ。原因として、現在働き口が減っていて集中しているのかも、とおっしゃっていた。勤務時間は 8 時～17 時、休憩を挟みながら 7 時間の作業だそうだ。網を編む技術は少しずつ身につける。新しく入った人はグループ分けで最初は簡単な作業から教え、1 人だいたい 3 年をかけて育成する。工場では網を床一面に広げ、グループごとに固まって座り、おしゃべりを楽しみながらしながら作業していた。

今は廃業になった近くの工場から移ってきた人もいる。例えば同じ電子工場にいた 4 人が働いているとおっしゃっていた。やはり賃金労働したくても家の仕事から離れることができず、近くで仕事を求める人がいるので、地域の工場はそういった人々の経済的な支えとして重要な役割を果たしている。

昨年（2015 年）、F さんの次男に社長の役職は代替わりしたが、F さん自身も現在でも作業の中心となって指揮をとっている。

4. 考察

高度経済成長の影響が地域に到達する前は、地域内の需要にあわせ、地域内で消費されるぶんの製品をつくる、といった工場ばかりだった。地域内で消費するだけをちょうど作ればよいので、工場の規模もそれほど大きくなくてもよく、農業の傍ら家族単位で製造するところが多かった。地域の中でそういった仕事を請け負う特定の家のみが製造に従事しており、その他の農家は農業以外の現金収入を求めて地域外へ出稼ぎに行っていた。

高度経済成長の影響が村に及び、交通が発達すると、地域外の需要をつかみ、大量消費される他の地域に輸送出荷する、といったこれまでとは異なる工場ができた。そうした新しい工場は、大量生産するため従業員を増やし、効率を上げるため地域に残っていながら家事以外の時間は比較的まとまって確保することできる主婦層を中心に雇用した。

そうした戦略で好景気の波にのり利益を上げたが、その後の重なる不況や社会の変化に打撃を受け、廃業になる工場が多かった。

今回の聞き取り調査で見えてきたその原因として、この地域が元来持つ「交通難」という面がとても大きく影響していると感じられた。製品に競争力を持たせるためにコストを抑えるという方法があるが、輸送コストがどうしてもかかってしまうこの地域には大変不利である。お話を伺っていくなかで、その弱点を何らかの工夫や努力をして今も自社内で消化しきれている工場が存続していることが分かった。

もう一つ、この地域で重要だと感じたのが、人材面である。工場の従業員の大部分は女性だが、工場では女性の出産や育児など女性の個々の事情に柔軟に対応している。従業員と工場の関係が密接である。地域全体で人口の減少が続くなか、製造を続けることができるのは、福利厚生など健全な作業環境・条件の維持によって、従業員との間の信頼関係を保ち続けることが軸になっている。

5. おわりに

産業はこれまで自分が関わってこなかった分野でしたが、工業の変遷についての語り口にひかれ、拙いながら今回取り扱わせていただきました。いろいろな方にお話を伺い、文献では知ることのできない生の声を聴くことでその興味が膨らんでいき、そのために複数回にわたって時間を割いていただくこともあったのですが、どの方にも親切丁寧に応じていただき、この報告書を書き上げることができました。貴重な体験ができました、本当にありがとうございました。